文献紹介

堀　正嗣　著

『障害児教育のパラダイム転換
― 統合教育への理論研究 ― 』

柘植書房（1994. 3. 10）8,240円

『障害児教育のパラダイム転換』は、従来の障害児教育を構成して来た支配的・主流的な思考の枠組を根源的に問い直し、新たなる方向性と在り方を理論的に究明した構想力の豊かな著作である。著者は「分離教育から統合教育へ」という障害児教育の変革をトーマス・クーンの“パラダイムシフト”の概念に依拠して理論的に究明しようとしている。その探求の動機の奥底深くにある著者の想いは“障害を持つすべての子どもがあたりまえに生活し、あたりまえに教育を受ける”ということにある。ところが、現存の障害児教育では、ある特定の人間は障害者と認定を受け、分類され、「障害者」のレッテルを貼り付けられて“特殊・特別の処遇”の体制のなかに投げ込まれて、そのような人間としての“あたりまえ”が奪い取られている。著者は、このような現存の差別の体制から人間を解放し、すべての人間が人間としてあたりまえに「共に生きる社会」を現実化し得る思想的基盤を探求・構築しようとしているのである。

『障害児教育のパラダイム転換』は、研究の問題意識と方法論を明確にした序章の他に、四部構成となっている。第一部の「障害者問題認識における視座の転換」においては、障害者問題が人権という観点から捉えられ、ノーマライゼーション論の理論的検討が行なわれている。第二部の「社会問題としての障害者問題」においては、「障害」を社会的に把握する視点が提示されている。第三部の「障害児教育の危機」においては、障害児教育の歴史的変遷が探求され、従来、取り組まれてきた分離教育としての障害児教育の本質が明確にされている。そして、それらの理論的な矛盾が指摘されている。第四部の「障害児教育のパラダイム転換」においては、分離教育を越えて、統合教育へと転換していくことの意味が明らかにされている。

統合教育への方向転換という著者の志向性の根底には、著者の近代社会への批判的な眼差しが存在している。統合教育への方向転換の作業は、近・現代の公教育体制を根源的・本質的に問い直して行くことであるし、近・現代の公教育体制を新たなる方向へと転換し得る可能性を孕んでもいる。著者は、統合教育への方向転換の作業において、学校教育の中での知のあり方を問い、またその課題に取り組む以前に『知』の認識の枠組自体の転換にも取り組まざるを得ないことも示唆している。また、著者は、従来の哲学や教育学や自明としての常識などが説く人間観や世界観をも根源的・本質的に問い直さなければならないことを示唆する。さらに、著者は、私たち人間を疎外し物象化して、そのような関係のなかに人間を投げ込んで来た近代社会自体を根源的・本質的に問い直して、疎外や物象化という関係を克服することの可能な新たなる社会を創造していくことを志向しているのである。（中城　進）